

中村 哲 医師
メモリアル
アーカイブ

DR. NAKAMURA TETSU
MEMORIAL ARCHIVE



リーフレット 表面

映像の紹介

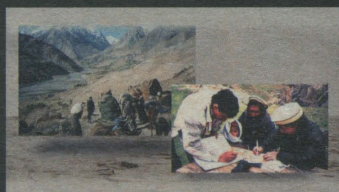
【人間は愛するに足る。真心は信ずるに足る】

ヒンズークシュ山脈最高峰ティリチミール登山隊の医療チームへの同行から中村医師の挑戦が始まった。医療の行き届かない辺境地域への巡回診療、診療所の設置、そしてペシャワール会の募金活動による拠点病院の建設と、医療体制の充実に尽力した。

【100の診療所より1本の用水路】

しかし、医療だけでは解決できない現状、荒れた地に人々の生活を取り戻すために、井戸を再生し、さらには無謀ともいわれた用水路の建設を実現した。干上がった荒地は、緑豊かな大地へと変貌し、中村医師の建設した用水路は現在、65万もの人々の生活を支えるに至った。こうした中村医師の現在に至るまでの功績を、日本電波ニュース社が長期にわたって現地で記録してきた映像資料と中村医師が遺した言葉で紡ぐ。

芸術工学研究院准教授：石井達郎



リーフレット 裏面

中村 哲 医師 メモリアル アーカイブ

DR. NAKAMURA TETSU
MEMORIAL ARCHIVE



中村哲医師メモリアル・アーカイブ設立にあたって

渡邊公一郎

九州大学大学院工学研究院教授／前国際担当副学長
ペシャワール会会員

中村哲先生は、アフガニスタンの大勢の民の命を救い、世界に「平和」とは何かを辺境から発信し続けた歴史に残る偉人であり、九州大学の学生の皆さんの大先輩でもあります。九州大学の内外から、そして海外から中村先生のことについて知ることができるデータベースが整備されます。中村先生のメモリアル・アーカイブを通して、是非若い皆さんに中村先生の生きざまを知ってほしいと思います。中村先生のひと言ひと言は、現地から時に鋭く、時にやさしく私たちに言葉を投げかけ、私たちのところに明かりを燈してきました。なぜ「一隅を照らす」必要があるのか。なぜ弱者に心を寄せる必要があるのか、強者の論理がいかに平和を遠ざけるか。平和とは理念ではなく現実の力である。中村先生の生きた軌跡、書き残した言葉を辿っていくと、多くの重要なことに私たちは気づかされます。

1983年に中村先生の現地医療活動支援のため福岡の地にペシャワール会が結成されました。九州大学の院生だった私はペシャワール会事務局の立上げに加わり、中村先生の生きざまに多くの影響を受けました。中村先生との出会いが自分を変え、今の自分があると思っています。メモリアル・アーカイブは九州大学医学部時代に中村先生のクラスメートだった久保千春前総長のご発案です。メモリアル・アーカイブが中村先生の志やメッセージを若い世代に語り継いでいくための拠点となることを切に願っています。

中村哲医師メモリアル・アーカイブによせて

村上 優

ペシャワール会会長

2019年12月4日中村哲医師が亡くなりました。九州大学医学部を卒業した1973年から46年間の足跡のなかで、直接に大学と関係したのは2014年特別主幹教授に就任してからです。彼の業績を学問というスケールではなく、人類史の中で測っていただいた結果と受け止めています。そして今回、中村哲医師メモリアル・アーカイブとして73年の生涯の記録を残していただく運びになったのには、多大な関係者のご配慮があったと感謝申し上げます。

中村哲医師は「行動の人」として広く多くの人々に影響を与えました。「アフガニスタンで真に必要とされること—異文化の中での国際貢献30年」と題した講演で、彼の地にこだわり一隅を照らす生き方が世界に共感と普遍的な人としての在り方、人間と自然の関係の在り方を呼び起こしました。歴史の片隅で忘れられ、無視されてきたアフガニスタンでの体験が、普遍的な意味を持つことを具体的な結果として残してきました。それが山村やハンセン病の医療であり、用水路に代表される灌漑システムであり、生きることに結びつく農業ですが、それと共に多くの叙事的で叙情的な記録が報告と思索の文章として残されています。彼が撮った写真一つをとっても膨大なものです。今後もこれらを基礎にして人間と自然について深く思索し行動する若者が出てくる、そのような源泉となることを願ってやみません。ペシャワール会はいつか役割を終える時が来るでしょうが、九州大学に集約された中村哲と彼に関連した業績がいつまでも残ると信じます。



藤田千代子

ペシャワール会理事

パキスタンの北西部ペシャワールでのハンセン病の診療から始まった中村哲医師の仕事は、国境の街という地理的な関係から必然的にアフガン難民の診療が加わり、更にパキスタンとアフガニスタン両国に跨り医療の恩恵に与れない人々への診療に拡大していった。2000年にアフガニスタンが大干ばつに被災し畑がすさまじく干上がった。何とかせねばと大急ぎで井戸の掘削に取り掛かった。この干ばつのさなかアフガニスタンからの国際支援団体の全面的な撤収により、厳寒の首都カーブルに取り残された国内避難民への診療、食糧配給を始めた。死に直面する人々を目前に見過ごさ(せ)ない中村医師は、必要に迫られ「救うにはこれしかない」と用水路を造るに至った。よく「医者になって40年後に、まさかアフガニスタンの川の中で重機を操縦しているとは想像もしなかった」と、話していたように、ハンセン病の診療が晩年には用水路の建設になり、聴診器を掘削機にかえ地域の住民と共に最期まで働き続けた。共に働くことは決してきれい事だけではない。はたから見て騙される事も多く、くさされたりもした。「それでも、人は愛するに足り、真心は信ずるに足る」と中村医師はいうのである。

現地での35年、そこにはまさに中村医師が大国に翻弄される歴史の中で絶望し途方に暮れる人々の中に身を投じ地表をうごめきながら、困っている人に寄り添ってきた姿がある。現地が国際的に「悪の枢軸」国と非難されても、その合唱に加わらず目線を支援の必要な人々から離さなかった。出来得る限りの力を尽くし命を救おうとした。このような中村哲医師を詩人でもない私の言葉はあまりにも貧しすぎて表現する術を持たないが、このメモリアル・アーカイブに集約された中村哲医師の単純かつ明瞭な言動から、それぞれの「中村哲とわたし」が築かれてゆくのではないかと思う。

堀 優子

九州大学附属図書館 eリソース課長

「中村哲医師メモリアル・アーカイブ」では、中村哲先生の意志を次の世代に広く伝えるため、展示の場に加え、「中村哲著述アーカイブ」を構築・公開しました。これは、ペシャワール会の協力の下、これまで中村先生が書き著した文章や発した言葉をデジタルデータの形で収集保存し、インターネット公開することにより、貴重な著述の散逸を防ぐとともに世界中からの永続的なアクセスを可能とするものです。中村先生が、活動報告で、講演会で、大小様々なメディアで、語ってこられたその量と内容の厚みには圧倒されるばかりです。それらの多くは、研究者による学術論文などと異なり、商業誌や一般の流通ルートに乗らない機関誌など、時間とともに目にすることが難しくなるものたちです。本アーカイブでは、そのような記事を拾い集め、目録データを作成し、発行元の許諾を得られたものから順次公開していきます。

中村先生のアフガニスタンでの35年間の活動と、語り著してこられたことは、医療、農業、国際協力にとどまらず、人文学、社会学など様々な分野において、優れた題材、研究の対象となるでしょう。また、中村先生の発したメッセージは、これからも私たちの生活や仕事において、拠って立つ指針となってくれるものと信じています。

このアーカイブが、中村先生のことを伝え、次のだれかの仕事につながっていく、その橋渡しができればと願っています。

●中村哲著述アーカイブは、九州大学附属図書館が運営する「九州大学学術情報リポジトリ QIR」上に構築し、蔵書検索システム「九大コレクション」から公開しています。

●本アーカイブでは、これからも継続的に、中村先生に関する資料を収集していきます。お手許にお持ちの方は、ぜひご提供ください。

お問合せ・提供先 九州大学附属図書館リポジトリ係
Tel:092-802-2459 | Mail:qir@jimu.kyushu-u.ac.jp

●製作:九州大学附属図書館

「中村哲著述アーカイブ」

<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/nakamuratetsu>



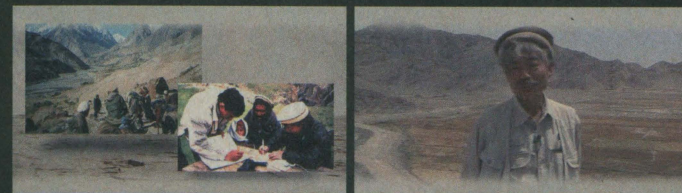
【人間は愛するに足る。真心は信ずるに足る】

ヒンズークシュ山脈最高峰ティリチミール登山隊の医療チームへの同行から中村医師の挑戦が始まった。医療の行き届かない辺境地域への巡回診療、診療所の設置、そしてペシャワール会の募金活動による拠点病院の建設と、医療体制の充実に尽力した。

【100の診療所より1本の用水路】

しかし、医療だけでは解決できない現状、荒れた地に人々の生活を取り戻すために、井戸を再生し、さらには無謀ともいわれた用水路の建設を実現した。干上がった荒地は、緑豊かな大地へと変貌し、中村医師の建設した用水路は現在、65万もの人々の生活を支えるに至った。こうした中村医師の現在に至るまでの功績を、日本電波ニュース社が長期にわたって現地で記録してきた映像資料と中村医師が遺した言葉で紡ぐ。

芸術工学研究院准教授:石井達郎



ひとつの小さな空間体験により、中村哲先生が描こうとした世界を感じていただきたいと考えました。

また、その世界を「屏風絵」のように表現しようと試みました。

ここでは、浮遊し透過する「屏風絵」に包まれることで、その世界の、拡がり、深さ、連なり、奥行きなどを捉えていただこうとしています。

この小さな空間体験は、以下のコンセプトにより映像・音・本とその相互作用で構成されています。

1. 「一人称」のメッセージ
中村哲先生自らの「言葉」と「視点」
2. 「拡がり」へのタッチポイント
共感を呼び起こす世界への拡がりへの出発点
3. 「探求」へのエントランス
「医」「水」「農」をキーワードとする知的世界への探求の入口

ガラススクリーンには活動の場を連想するアフガニスタンの山々を浮かべ、そして屈曲するメッセージ・スクリーンとしての「屏風絵」には中村哲先生自らの言葉が浮かびます。

わたしたちは、自らの意志で境界のない世界をさまよい、自らの身体で探索・発見し、そして人々とともに新しい世界をつくっていきます。このメモリアル・アーカイブは、中村哲先生の単なる業績紹介のためではありません。ふつうでは到底とらえきれない、そして見えないことも意識する、その世界へと「繋ぐ空間」です。

この小さな空間体験が、学生のみなさんの将来の財産となることを期待しています。

展示スペースのガラススクリーンには、九州大学の学生たちが中村先生の著書から抜粋した文章が並び、あたかも中村先生が一人ひとりに語りかけるように心に響きます。文章の選定にあたっては、学部1年生から大学院博士課程3年生までの学部も年齢も異なる5名の有志の学生が集まり、著書を読んで語り合う読書会を実施しました。読書会では、学生が将来の指針にしたいと思う、心に響く言葉がたくさん挙がりました。

病氣は後で治せる。ともかく生きのびておれ！

－（医者、井戸を掘る／p10）

アフガニスタンの人々の落命の原因は、多くが清潔な飲料水の不足という医療以前の問題であることを知りました。そして、私たちは普段不自由なく生活できていることに感謝し、同時に世界中にはアフガニスタンのように厳しい生活状況の中で必死に生きている人が多くいるという事実を目を向けて、考えなければならないと思いました。（細谷うらら・九州大学医学部）

私の意図は、目前にした事実を伝え、平和を願う意志を理屈から力に転化することであった。観念の戦いは不毛である。平和は戦争以上に積極的な力でなくてはならぬ。

－（医者、用水路を拓く／p34）

非常時に抽象論は力を失い、混乱した群衆が弱い立場の人々を傷つける。平和を取り戻すのは命がけの行動になる。空爆がはじまるアフガニスタンで中村先生らを救援活動へ突き動かしたものは「論理を超えた自然の衝動」でした。彼らの力は私の想像を超えていますが、他者を守るために、私たちはもっと力を発揮できるのだという事を教えられている気がします。（高濱良・九州大学農学部／大学院生物資源環境科学府）

この八年間、いや、この数ヶ月の労苦を知る者は、陽光にまばゆい一本の麦の穂にも、子供たちの一つの笑顔にも、万金に値する貴さをかみしめることが出来ただろう。労苦の痕跡は、心中に見えざる人の温もりとして残るのみである。そして、それでよいのだ。

－（医者、井戸を掘る／p134）

何かを成し遂げたとき、それまでの自分の努力や苦勞を知っている人は必ずいて、それらをあえて目に見える形として残す必要はないという、中村先生の謙虚さを自分も見習いたいと思いました。自分が何かを見るときには、温かい心を持つことで「麦の穂」のような小さなことにも価値を見出せるようになるのではないかと考えました。（細谷うらら・九州大学医学部）

「良い経験になった」などというセリフは止せ。君らのロマンや満足のために仕事があるのではない。ともかく結果を出せ。

－（医者、用水路を拓く／p177）

中村先生が現地の人々のためにご活動されたことを顕著に表す言葉だと理解しています。さらに、彼が現地の人々の信頼を得ることができた一因となる言葉だと思い、意義深く感じます。私は共創学部にも所属していて、将来人道支援に携わることも考えていますが、その際、目的を見失いがちな私にこの言葉は喝を入れてくれると思います。（岡本偉吹・九州大学共創学部）

尽きぬ回顧の中で確かなのは、漠漠たる水なし地獄にもかかわらず、アフガニスタンが私に動かぬ「人間」を見せてくれたことである。

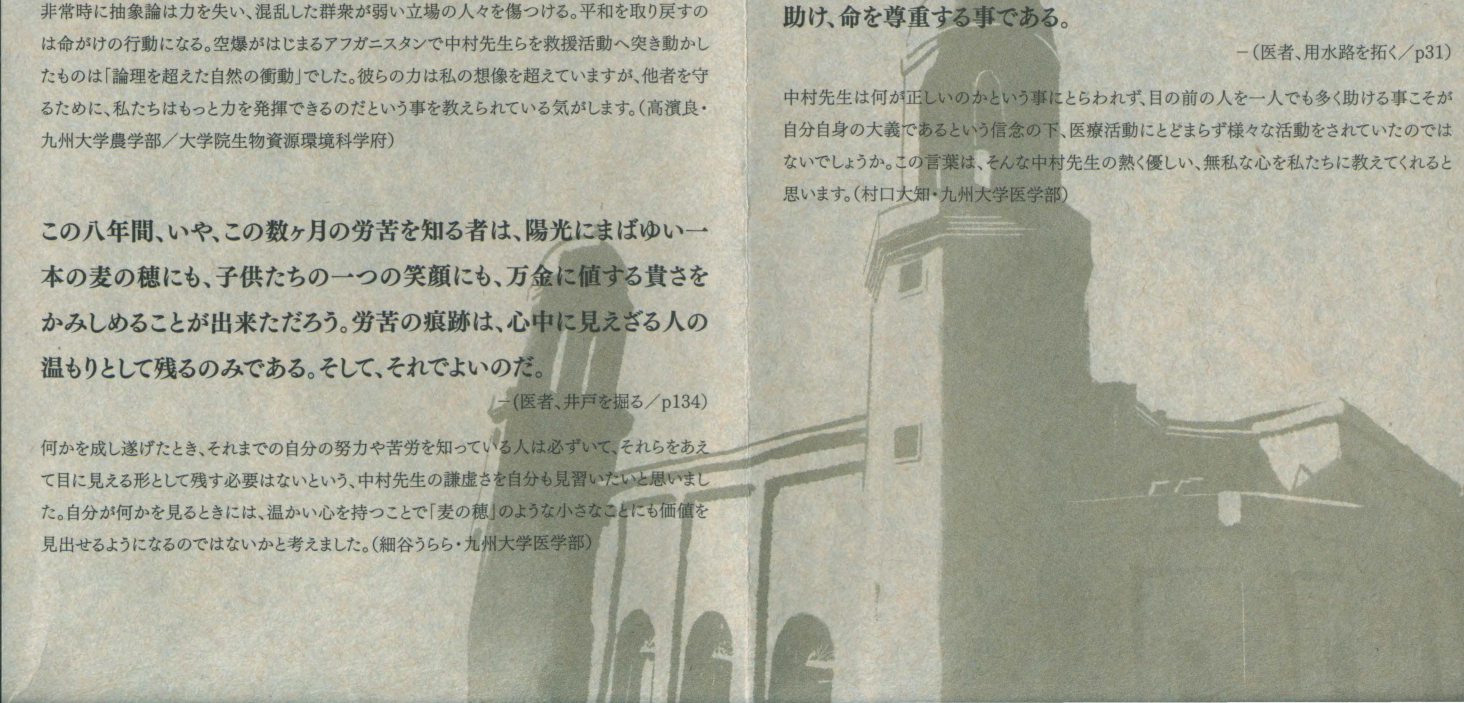
－（医者、用水路を拓く／p24）

アフガニスタンの人々が動かぬ人間であるのに対して、我々は大地から足が浮いてしまった人間。つまり、我々の文明は発展と同時に自然との向き合い方を忘れてしまったということです。しかし、本来の人間の生き方はそうではなくて、中村先生が目にしたような、常に自然と向かい合っ

正義・不正義とは明確な二分法で分けられるものではない。敢えて「変わらぬ大義」と呼べるものがあるとすれば、それは弱いものを助け、命を尊重する事である。

－（医者、用水路を拓く／p31）

中村先生は何が正しいのかという事にとらわれず、目の前の人を一人でも多く助ける事こそが自分自身の大義であるという信念の下、医療活動にとどまらず様々な活動をされていたのではないのでしょうか。この言葉は、そんな中村先生の熱く優しい、無私な心を私たちに教えてくれると思います。（村口大知・九州大学医学部）



中村哲医師は、2014年に母校である九州大学の高等研究院特別主幹教授に就任されました。就任に当たって執筆された文章をここに転載します。

メッセージ

中村哲（九州大学高等研究院特別主幹教授）

特別主幹教授など、自分のような現場人間には縁がないと考えていましたが、お引き受けしたのは訳があります。

仕事上、東部アフガンの地に深く関り、戦争、難民、貧困、干ばつ、民族対立など、多くの厄災を身近に見てきました。しかし、私たちが自負してきた医療や科学技術の無力さをも知りました。私たちの「知の営み」がどこに向かっているのか、感ずるところがあったのです。特に、進行中の大干ばつの対策に追われながら、自然と人間との関わりが、今後あらゆる分野で大きな主題とならざるを得ないと考えてきました。

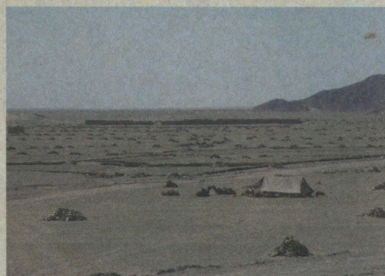
過去私たちが学び求め、当然としてきたことが、大きく問い直される時代に入っていると実感しています。実際、地球上から経済的なフロンティアが消え、環境変化に脅かされるなど、技術文明が到る所でそのほころびが見えています。世界観もまた、膨大かつ断片的な情報にふりまわされ、確固とした支点を失いつつあるようにも思えます。

この中にあって高等研究院は、学問の分野を超え、時間と忍耐をかけ、総合的に次の時代の「知のベクトル」を紡ぎ出す、意欲的な試みだと理解しています。末席にあって、現場の実情を伝え、母校の微力になればと思っています。

出典：<https://ias.kyushu-u.ac.jp/pastprofessor/188/>

「自然は人間だけのものじゃない、
人間も自然の一部である」

中村哲医師は、仕事の合間をぬって、昆虫や花、ラクダなどの生き物の写真をよく撮影されていました。その背景には、「自然は人間だけのものじゃない、人間も自然の一部である」という、中村先生の思いがありました。（藤田千代子氏談）



設置：九州大学

運営：九州大学附属図書館

展示空間デザイン：九州大学大学院芸術工学研究院

田上健一／秋田直繁／池田美奈子／石井達郎／伊原久裕／

大井尚之／尾本章／工藤真生

言葉の選定：岡本偉吹・共創学部／川藤知恵・大学院統合新領域学府

高濱良・大学院生物資源環境科学府／細谷うらら・九州大学医学部／

村口大知・九州大学医学部

協力：ペシャワール会／日本電波ニュース社

◎リーフレット

2021年3月発行

発行：九州大学

福岡市西区元岡744番地

touservice@jimu.kyushu-u.ac.jp（附属図書館利用者サービス課）

編集・デザイン：九州大学大学院芸術工学研究院 伊原久裕／

工藤真生／池田美奈子／川波花音・芸術工学部

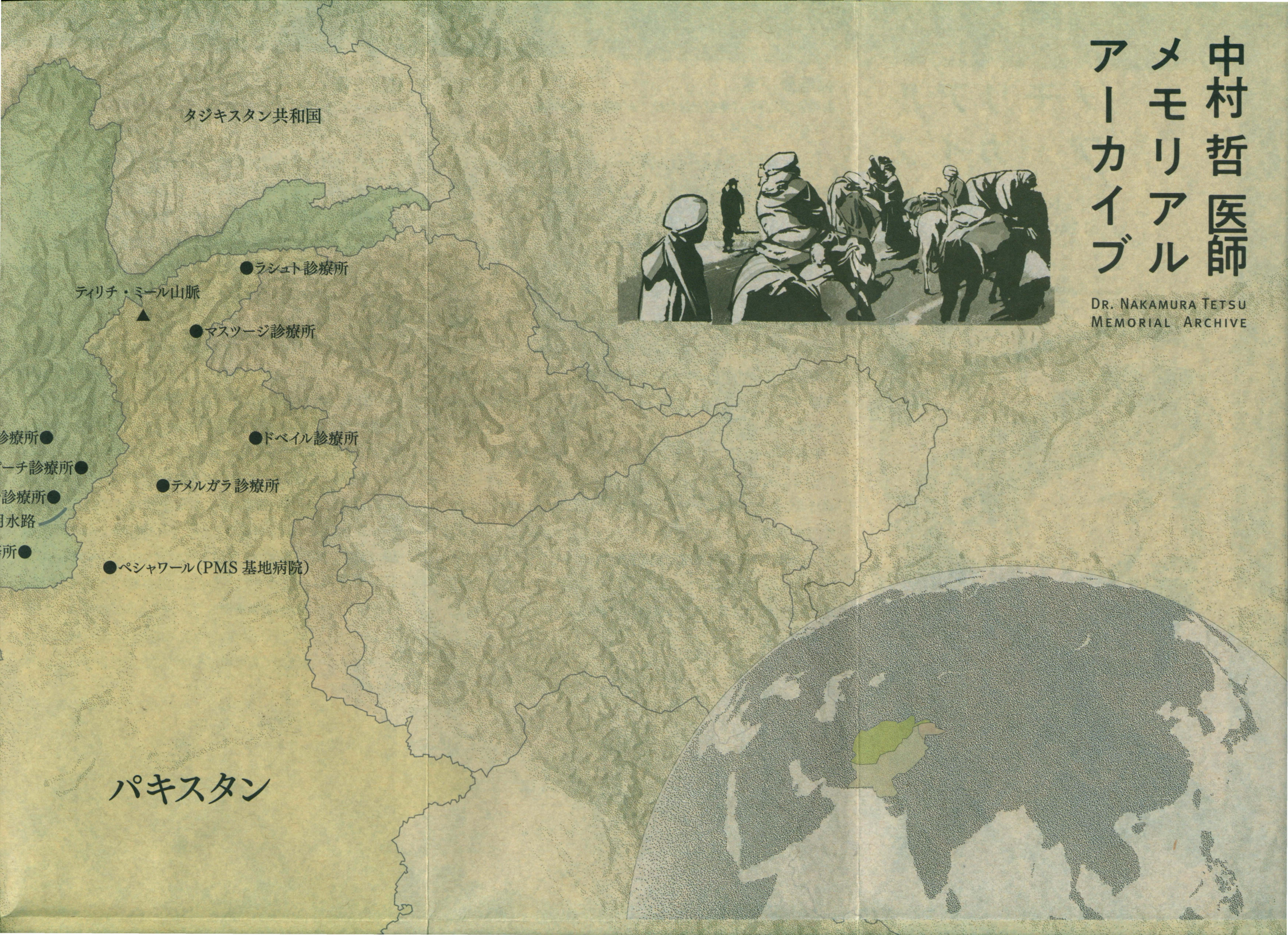
イラストレーション：宋禹萱・芸術工学部

印刷所：ミドリ印刷



中村哲医師 メモリアル アーカイブ

DR. NAKAMURA TETSU
MEMORIAL ARCHIVE



タジキスタン共和国

● ラシエト診療所

テリチ・ミール山脈

● マスツージ診療所

● ドベイル診療所

● テメルガラ診療所

● ペシャワール (PMS 基地病院)

診療所 ●

ーチ診療所 ●

診療所 ●

水路

所 ●

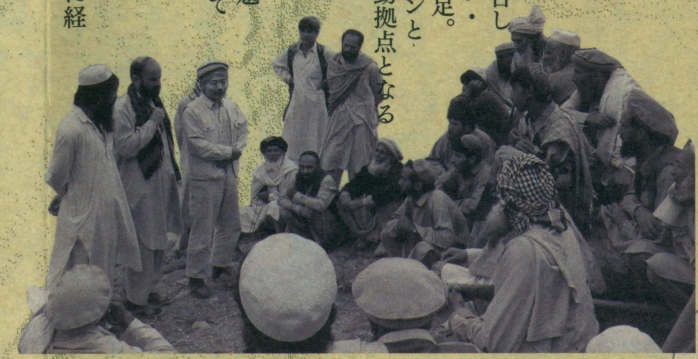
パキスタン

10月—ペシャワール・ミッション病院の活動を終了。PLS（ペシャワール・レプロシ・サービス）病院を設立。以来、パキスタン北西部の医療過疎地に数カ所の診療所を開設

1996 9月—タリバン政権樹立

1998 4月—JAMSとPLSを統合しPMS（ピース・ジャパン・メディカルサービス）を発足。ペシャワールに、パキスタンとアフガニスタン両国の活動拠点となるPMS基地病院を開設

2000 6月—アフガニスタン全土で旱魃が深刻化し、緊急対策として水源確保事業を開始。
2008年までに井戸1600以上を掘削
11月—国連安保理タリバン政権に経済制裁決議



2001 1月—国連安保理追加経済制裁アフガニスタンから国際支援団体撤退
3月—バーミヤンの仏跡をタリバンが破壊カブールに5カ所の臨時診療所を開設
9月—米国同時多発テロ事件勃発
10月—カブールで米英軍による大規模空襲が始まる「アフガンのちの基金」を設立し、カブールで食糧の配給を開始
12月—カルザイ暫定政権樹立翌年6月大統領に就任

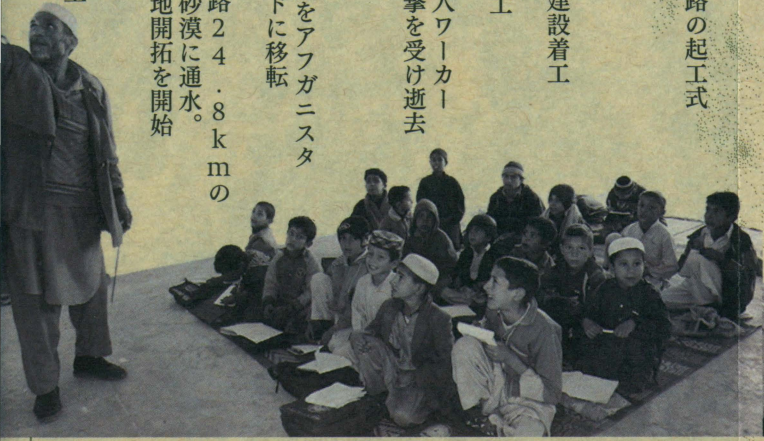
2002 2月—アフガニスタン東部における長期的農村復興「緑の大地計画」発表



2003 3月—マルワリード用水路の起工式イラク戦争が勃発

2008 1月—モスク・マドラサ建設着工
3月—シェイワ取水堰完工
8月—現地活動中の日本人ワーカーの伊藤和也氏が襲撃を受け逝去

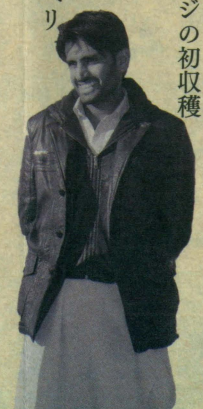
2009 7月—PMSの活動拠点をアフガニスタンのジャララバードに移転
8月—マルワリード用水路24.8kmの最終地点ガンベリ砂漠に通水。ガンベリ砂漠に農地開拓を開始
9月—マドラサを開校し、約600名の学童が通学



2015 12月—PMSガンベリ事務所を設立し、農業班・灌漑班を置き、開拓事業の自立体制を本格化。ガンベリ試験農場でサトウキビを栽培し黒砂糖の復活生産に成功

2016 2月—アフガン東部で季節外れの大洪水が発生し、ジャララバード市内が浸水。高地で降雪と雪崩が頻発
3月—ガンベリ主幹排水路1.8kmの工事を開始
7月—パキスタン政府アフガン難民強制送還へ

2017 10月—FAO（国連食糧農業機関）との関連事業で、PMS取水方式の広域普及を目指し、人材育成のためのミラーン訓練所を建設（2017年11月完工）。マルワリードII堰・用水路着工
3月—日本大使館の支援でナツメヤシ464本をガンベリ農場に植樹



2018 4月—PMS職員研修のため本邦招聘開始
1月—ミラーン訓練所で「PMS取水方式」の人材育成を開始
2月—アフガニスタンのガニ大統領がPMSと中村哲医師に勲章を授与
6月—土木学会技術賞受賞



2019 2月—山田堰をモデルにしたPMS取水方式の標準設計となるカマ第I堰を完工
3月—植樹が100万本を突破
4月—ガンベリ農場で養蜂事業開始
5月—ウラマー（イスラム社会の最高権威と伝統的な宗教委員会）が、中村哲医師及びPMSを表彰



2020 10月—ガニ大統領より「アフガニスタン・イスラム共和国市民証」を授与
12月4日—作業現場に向かう途中、何者かに襲撃され、病院に移送された後、死去。享年73歳
村上優会長がPMS総院長を引き継ぎ、ペシャワール会とPMSは事業の継続を正式に決定
9月—ガンベリ公園に、ドクターサーブ・ナカムラ記念塔が完成
12月—マルワリードII堰・用水路が竣工し、流域での新開地で村人による耕作が拡大
バルカシコート堰着工

中村医師と現地事業の足跡

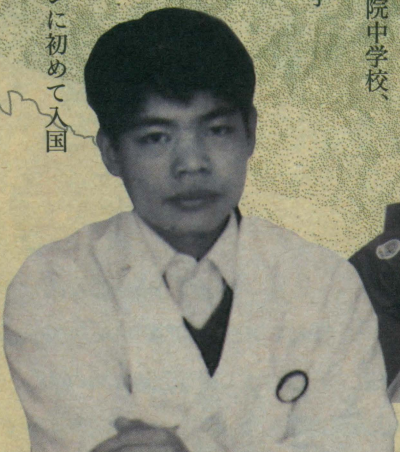
1946

6月 福岡県にて出生。
古賀西小学校、西南学院中学校、
福岡高等学校、
九州大学医学部に進学



1978

福岡登高会のティール
チミール遠征隊同行
医師としてパキスタンに初めて入国



1983

4月 JCCS(日本キリスト教海外
医療協力会)が、パキスタンのペシャワール・
ミッション病院の要請に応じて、中村医師の派遣を決定

6月 ペシャワール会が発足

1984

パキスタンのミッション病院に着任

1986

ALS(アフガン・レプ
ロシー・サービス)のち
のJAMS)を設立し、
パキスタンのアフガン難民
診療を本格化。更にアフガ
ニスタンにも活動を展開。

4月 足底穿孔症予防用のサンダル
工房を開設



1989

2月 旧ソ連軍がアフガニスタンより完全撤退



1990

パキスタン・バジヨワール県テメルガラに
初の診療所開設

1991

1月 湾岸戦争勃発

12月 アフガニスタン国内のナンガラハル州北部の
ダラエメールに最初の診療所を開設

1992

5月 アフガン難民の爆発的な帰還が始まり、アフガニスタン
東部の山岳無医地区に次々と診療所を開設

6月 ラバニ政権樹立

1993

ダラエメール診療所一帯で悪性マラリアが大流行し、
20000万円以上の緊急募金で2万人以上の命が救われる

1994

2010

3月 マルワリード用水路完工



8月 アフガニスタン
・パキスタンで
100年に1度の大洪水

2011

3月 カマ第2堰・用水路を竣工

2012

4月 カシマバード堰・用水路
及びベスードの護岸
3.5kmが竣工

9月 マルワリード用水路流域の
村民を束ね、第1回定例浚渫
(しゅんせつ)を実施

10月 マルワリード＝
カシコート連続堰

の着工(2014年
9月竣工)

2013

6月 記録的な大洪水によりアフガニスタン各地で堤の決壊や溢水
が発生

2014

4月 ガンベラ試験農場にて畜産を開始